

研究ノート

地域連携による大学生の学びの質に関する考察

古根川 円*1

キーワード：地域連携、大学、大学生、学びの質、問題解決型学習（PBL）

1 はじめに

1.1 研究の背景

近年、大学の教育や研究活動が地域と連携を図り、地元住民とともに、地域おこし活動を実践する取り組みが増加傾向にある。従来は産学連携のように地元企業と大学の研究活動の共同であったが、教員・大学生が地域の現場に入り、地域おこし・健康増進活動・学び直しの機会提供等、地方で不足する若い人材力を地域活性化に活用するものなど多岐にわたる。このような取り組みは国の事業として行われており、文部科学省では、2015年度から大学が地方公共団体や企業等と協働して、学生にとって魅力ある就職先の創出をするとともに、その地域が求める人材を養成するために必要な教育カリキュラムの改革を断行する大学の取り組みを支援するプロジェクトを実施している。すなわち地方創生の中心となる「ひと」の地方への集積を目的とした「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」¹⁾である。総務省でも、「地域力の創造・地方の再生」²⁾を目指し、大学教員による地域実践活動に関する情報発信、学生教員相互の情報交換やノウハウ交換、そして大学教員と地域（地方公共団体）との連携のマッチングの3つを目的とした地域実践活動に関する大学教員ネットワーク³⁾を立ち上げている。地域と大学に関する研究は、地域活性化の取り組みに関する研究「大学と地域の連携—継続の効果と課題—」（深沼 2010）や、地域連携の実態・課題を研究した「大学地域連携の実態と課題」（中塚ら 2016）がある。大学と地域連携の目指すところは、地域視点では地方の活性化、若者の定住促進等があり、大学視点では大

学の生き残り戦略のひとつであるかもしれない。しかし、地域にありながら地域住民には遠い存在であった大学が、地域に開かれることで、大学側にもたらされるものは何であるのか。筆者は大学生の「学びの質」に変化があるのではと考えている。

1.2 研究の目的

大学生に求められている学びとは、2008年中央審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」⁴⁾において、学士力が明確に打ち出された。すなわち、1.知識・理解、2.汎用的技能、3.態度・志向性、4.統合的な学習経験と創造的思考力である。学士課程の学びへの接続として、2014年「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について（答申）」⁵⁾では学力の三要素が次のように示された。「学力の三要素を、社会で自立して活動していくために必要な力という観点から捉え直し、高等教育を通じて (i) これからの時代に社会で生きていくために必要な、「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度（主体性・多様性・協働性）」を養うこと、(ii) その基盤となる「知識・技能を活用して、自ら課題を発見しその解決に向けて探求し、成果等を表現するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力」を育むこと、(iii) さらにその基礎となる「知識・技能」を習得させること。」と示されており、整理すると 1.基礎的な知識・技能、2.思考力・判断力・表現力等の能力、3.主体性・多様性・協働性となる。高等学校教育から大学教育の学びを接続すると図1のようになる。

*1 至誠館大学 ライフデザイン学部

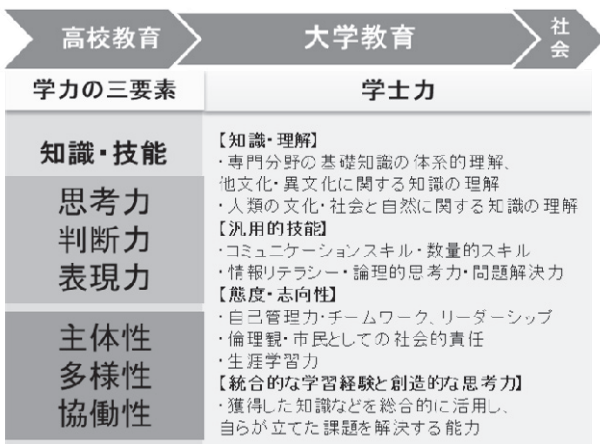


図1. 高校教育から大学教育へ（図作成筆者）

前掲のように大学と地域連携の報告・事例研究はみられるものの、地域連携から大学生が得る学びに焦点を当てたものは少ないように感じられる。そこで本研究では地域連携活動の中で「主体性・多様性・協働性」「汎用的技能」「統合的な学習経験と創造的思考力」を目指す、コミュニケーションスキルや主体的に課題を解決する能力を獲得するために、実践経験を通して学生の「学びの質」に変化が見られるのかを明らかにすることを目的として行った。

2 研究方法

2.1 研究対象事例

- a) 地域連携活動：2019年阿武町立福賀小学校放課後子ども教室 夏休み特別企画「ハンドベル体験教室」
- b) 期間：第1回令和元年8月7日、第2回8月21日、第3回8月28日
- c) 参加者：小学生8名（1年生1名、2年生1名、3年生2名、4年生2名、5年生1名、6年生1名：男子5名、女子3名）
指導員3名、教育委員会職員1名
- d) 研究対象者：至誠館大学ライフデザイン学部ライフデザイン学科 サークル MCL（Music Communication Lab.）音楽奏で隊メンバー4名（1年生2名、2年生1名、4年生1名：男子1名、女子3名）

2.2 地域連携経緯

阿武町教育委員会では阿武町立福賀小学校児童を対象に、“放課後の居場所づくりと有意義な経験から成長の機会をつくる”ことを目的に、毎週水曜日の放課後に遊びや勉強等様々な体験活動を実施している。小学校が夏休み期間に、普段とは違う体験をさせたいとの依頼を受け、至誠館大学でハンドベルを中心に活動しているサークルが引き受けることとなった。

開催趣旨：阿武町教育委員会

「阿武町教育委員会では福賀小学校児童を対象に、毎週水曜日の放課後に遊びや勉強・様々な体験活動などを行い、“放課後の居場所づくりと有意義な経験から成長の機会をつくる”「放課後子ども教室」の特別編として、至誠館大学 MCL（Music Communication Lab.）音楽奏で隊と共同で、夏休み期間中にハンドベル教室を企画しました。連続3回講座（8月7日、21日、28日）の最終回には、福賀地区高齢者福祉複合施設「いらお苑」において発表会を行い体験の成果を披露するとともに、多世代にわたるふれあいの機会をつくりたいと考えております。」

2.3 実践

- a) 曲目：・さんぽ（「となりのトトロ」より）
・ふるさと

小学生から高齢者まで幅広い世代が知っている曲を選曲

- b) 楽器：ミュージックベル（ハンドベルの簡易版）

理由：①参加した大学生が MCL 音楽奏で隊というハンドベルを中心に活動するサークルメンバーであること。②ハンドベルやミュージックベルの魅力として次の三つが挙げられる。一つめは1人が1音～2音を担当し1人で1曲全部演奏するより易しく取り組めること。二つめは自分が演奏していない時も、他の人の出す音をよく聴き、頭の中で歌う「内唱」を行うことができる。この方法は、時には声を出す以上にソルフェージュ力向上に効果があると言われている。コダー

イ・メソッド⁹⁾では、幼児期からわらべうたの内唱をするなど、内的聴覚の発達を重要視している。三つめは他の人と協力することで一つの曲ができあがる、協力・協働を体験できる点である。

c) 練習の流れ

第1日目

- ・小学生と大学生の対面式 (図2)
- ・自己紹介
- ・模範演奏 (図3)
- ・グループ分け (学年が分散するように留意した)
- ・担当音決め
- ・楽譜の読み方説明 (事前に色分けしている) (図4)
- ・ベルを持って音出し
- ・ベルの持ち方と音の出し方説明
- ・「さんぼ」の練習



図2. 対面式



図3. 模範演奏



図4. 色分けした音の説明

第2日目

- ・「さんぼ」の練習
- ・「ふるさと」の練習
- ・ダンス (パプリカ) 練習 (図5)



図5. ダンス (パプリカ) 練習

第3日目 高齢者福祉施設で発表

- ・練習と打ち合わせ
- ・高齢者福祉施設に移動
- ・発表会開始 (図6、7)
- ・閉会
- ・練習会場に移動
- ・放課後子ども教室閉会式 (図8)
- ・小学生 感想発表



図6. 成果発表の様子1



図7. 成果発表の様子2



図8. 感想を発表し合い閉会式

3 考察

3.1 問題解決型学習 (PBL)

今回の活動を通じて大学生の学びに期待することは、学力の三要素で示すと、思考力・判断力・表現力、主体性・多様性・協働性であった。学士力に置き換えると、【汎用的技能】コミュニケーションスキル、問題解決力、【態度・志向性】チームワーク・リーダーシップ、【統合的な学習経験と創造的な思考力】獲得した知識

などを総合的に活用し、自らが立てた課題を解決する能力であった。(図1) 地域の小学生にハンドベルを体験してもらい、発表会をするという一連の活動の中に、大学生に必要とされている力の大部分を獲得できる要素があると考えられる。昨今、授業に取り入れるべき方法のひとつであるアクティブ・ラーニングも活動を通じた教育方法であるが、今回の活動は「問題解決型学習 (PBL)」といえる。問題解決型学習 (Project Based Learning) は別名「課題解決型学習」とも呼ばれ、知識の暗記等の受動的な学習ではなく、自ら問題を発見し解決する能力を養うことを目的とした教育法のことを指す。正しい答えを求めることが重要なのではなく、答えに辿り着くまでのプロセスを重視する学習理論である。1900年代初頭にアメリカの教育学者ジョン・デューイ (1859-1952) が初めて教育現場に取り入れたと言われている。問題解決型学習 (PBL) には「チュートリアル型」と「実践体験型」の2つの方法があり、今回の地域連携活動は「実践体験型」であり、実践の中で大学生が課題を発見し、解決していく力を「学び」として着目した。

3.2 大学生の意識の変化

活動を評価し自己分析をする方法としてルーブリック評価法、ポートフォリオ評価法、パフォーマンス評価法など様々なフィードバックの方法があるが、今回の実践は正解のない課題を通して、そこから自身の課題を見つけ問題解決へのアプローチ方法を探し出すことを重視した。つまり、理想とするイメージはあるが、やってみなければわからないといった、より社会生活に近いものであると考える。こうあるべきという固定概念を超えて、協働で創り上げていく「過程 (プロセス)」を重視している。大学生の体験前・体験後の意識の変化を見るために、実践後に自己評価アンケートと5段階 (1<5) の自己採点を行った。(表1)

表 1. 地域連携活動の体験前と体験後を比較した自己評価表

項目	体験前		体験後		
	記述	評価	記述	評価	
① 演奏に関する こと	音符を読むこと	・初心者ですぐに音符が読めなくて不安で、怖かった ・音符を読むのに時間がかかる ・高校ではあまり音符を読まないのが難しい	3	・小学生用に色分けしたのが自分にも役立った ・前より音符が早く読めるようになった ・段々慣れてきた	4
	テンポを取る	・自分が苦手なので不安 ・メトロノームを使ってテンポを覚えた	3	・手拍子を取り、ゆっくりから沢山テンポを取った ・手拍子を取って教えた。歌も歌いながらだったので一定を保つのが難しかった	5
	リズムを取る	・自分が苦手なので不安	3	・声掛けをしてリズムを取ったり歌ったりした	4
	歌詞について	・曖昧なところがあったのでしっかり覚えないと ・歌詞については今まで考えていなかった	3	・少しずつみんなが歌ってくれて嬉しかった ・今回も歌詞の意味を考えるとところまで至らなかった	4
② 教える こと	言葉がけ	・不安しかなかった ・最初は小学生にどんな言葉をかければよいのか戸惑った	3	・少しずつ自分の思いやイメージを伝えられた気がする ・時間がたつにつれ、以前より子どもたちに色々な言葉をかけられるようになった	3
	教えることについて	・自信がなかった ・どうやって教えればよいのかわからなかった	3	・二人で1グループを教えたので不安は取り除けた ・いろいろな人の教え方を真似たり、大人の方に助けをもらいながらどのようにすればよいのか学べた	5
③ 人前で 話す こと	立ち方	・日頃人前に出ないし、出てもクネクネしてしまう	2	・やはり人前だと緊張でクネクネしてしまった	2
	目線	・下を見ず、相手のほうを見て話したい ・人前で話すときはいつも目線が下がる ・目を見て、子どもたちの目線に合わせて	2	・人が大勢だと目線が下がってしまうが、少しは成長できた ・今回も下がってしまった。今後気をつけたい ・目を見て、子どもたちと目線を合わせることでできた	3
	内容	・たくさんやることがあり、パニックになりそうで不安 ・話す内容を事前に決めて・覚えてからでないと話せない	3	・自分の役割ができたと思う ・突然話しを求められても普通に話せるようになった	4
	話し方	・日頃から気をつけているので、これに関しては自信がある ・人前で話すときは声が小さく、早口になってしまう ・早口にならないように	3	・丁寧な言葉遣いを心掛けた ・今回の体験でも声が小さく、早口になってしまった ・ゆっくり、はっきりを心掛けた	4
④ 企画・ 発表に ついて	企画に関して	・面白そうだった	2	・たくさん年齢の子どもたちと触れ合えた。人前で教えるという感覚も味わえてとてもよかった	5
	自分の役割	・先輩との関係も守りながら、補助しながら学びたい ・代表で子どもたちの前で教えるのは嫌だと思っていた	3	・ダンスを教えたり、班の中心として動かした ・うまくはできなかったが、自分の役割は果たすことができたと思う	5
	準備等関わり方	・素早く動いて、速くできるようになりたい ・練習を休んだりして迷惑をかけた	3	・撤収や準備は素早くできた	4

アンケートの項目は演奏に関すること、教えること、人前で話すこと、企画・発表についての4項目を設定した。学士力（図1）に当てはめると、①（演奏に関すること）は【知識・理解】、②（教えること）は【汎用的技能】ではコミュニケーションスキルや問題解決力、【態度・志向性】ではチームワーク・リーダーシップ、③（人前で話すこと）は【汎用的技能】ではコミュニケーションスキル、【態度・志向性】ではリーダーシップ、【統合的な学習経験と創造的な思考力】と関係性が高く、④（企画・発表について）は【知識・理解】【汎用的技能】【態度・志向性】【統合的な学習経験と創造的な思考力】の4項目を網羅しており、獲得した知識などを総合的に活用し、自らが立てた課題を解決する能力を要すると考えられる。

表1の①（演奏に関すること）では、大学生自身も音楽は得意ではなく、ハンドベル初心者であるが、小学生に教えることで「手拍子を取り、ゆっくりから沢山テンポを取った」や「声掛けをしてリズムを取ったり歌ったりした」と、苦手意識がある学生たちが自分から進んで行動をしている様子が見られる。②（教えること）についても、体験前は「自信がない」「不安」「どうやって教えればいいのか分からない」と記入しているが、体験後は「いろいろな人の教え方を真似たり、大人の方に助けてもらいながらどのようにすればいいのか学べた」と普段なら見過ごしてしまうことを、他者から「まねぶ」ことで問題解決の糸口を見つけている。③（人前で話すこと）についての“目線”では、「人前で話すときはいつも目線が下がる」とすぐには改善されなかった様子であったが、子どもたちに対しては「目を見て、子どもたちの目線に合わせて」と体験する前から意識をもっていたことを実際に実践できた様子が見られる。“話し方”は体験前の「早口にならないように」が、体験後は「ゆっくり、はっきりを心掛けた」や「丁寧な言葉遣いを心掛けた」など人に伝えることを意識した内容に変化が見られた。④（企画・発表について）は、体験前は「面白そうだ」と前向き

な意見がある一方、「代表で子どもたちの前で教えるのは嫌だと思っていた」など自ら進んで関わろうとする意識が低いことがわかる。しかし、体験後は音の説明や、ダンスの説明、司会などそれぞれが担った役割をやり遂げたことで「よかった」「できた」など前向きな言葉に変化が見られた。評価値は全員の平均値であるが、体験前と体験後では13項目中11項目で上昇した。上昇しなかった2項目は、記述内容では上昇傾向にあったが、数値としては体験前後で変化が見られなかった。

今回、大学生活の中で体験することが少ない「人に教えること」については、言葉がけや、目線、演奏に関するテンポ、リズム等の教え方等、実践の中で何とかしなければという意識からか、行動に変化が見られたことが顕著であった。



図9. 学生A 教えること①



図10. 学生A 教えること②

表 2. 地域連携活動全体を通しての感想

全 体 感 を 想 通 し て	・このような体験は初めてだったけど、小学生がみんな楽しかったと言ってきて嬉しかったです。 ・人前で話すのは苦手で、今までは友達とかに全部任せていました。今回みんなの前で話し機会があって、全然うまく話すことは出来なかったけど大勢の前で話す練習になりました。 ・教育委員会の方の話し方や話の回し方が上手くて、私自身の勉強になったので良かった。 ・最初はずごく不安が大きくて、自分にできるのか悩んだりしたのですが、数をこなして少しずつ自信がついてきたように思います。 (学生記述そのままを活字にした)
--------------------------------------	---

例えば学生 A の行動を観察してみると、同じ小学生に対して教え始めは立ったまま指導していたが(図 9)、次第に腰を落として小学生と同じ目線で教え始める光景が見られた。(図 10) このように一人の学生の行動観察からも主体的な取り組み・改善がなされていたことがわかる。表 2 の全体を通しての感想記述からは、学生たちが目の前の小学生の「楽しかった」という言葉や、できなかったことができるようになった姿を自分自身の達成感と捉えていることがわかる。

のように取り入れ、そして生きた学びの場といえる地域連携にどのように反映していくかである。

謝辞

本研究の実施にあたり、貴重な機会と場所を提供いただきました阿武町教育委員会社会教育係石田雄一主任をはじめ、阿武町立福賀小学校放課後子ども教室スタッフ・児童の皆様、福賀地区高齢者福祉複合施設「いらお苑」関係者の皆様に感謝申し上げます。

4 おわりに

本研究では地域連携活動の中で「主体性・多様性・協働性」「汎用的技能」「統合的な学習経験と創造的思考力」が目指す、コミュニケーションスキルや主体的に課題を解決する能力を獲得するために、実践経験を通して学生の「学びの質」に変化が見られるのかを明らかにすることを目的として行った。地域と大学が連携し、世代や業種を超えて地域に貢献できることは知の拠点としての大学の役割である。このような交流による生産的、経済的効果は目に見えやすいが、筆者は「学びの質」のようにすぐに効果や成果が見えにくい内的なものに及ぼす効果に期待している。

今回、実践を行った「放課後子ども教室」に参加した学生たちが自らの課題を解決しようとした「過程(プロセス)」には、成果以上のものを感じた。

今後の課題は、学生の中に芽生えた「主体性・多様性・協働性」「汎用的技能」「統合的な学習経験と創造的思考力」の芽をどのように継続して伸ばしていくかである。大学講義と併せ問題解決型学習(PBL)をど

[引用文献]

- 1) 文部科学省 (2015) 「地 (知) の拠点大学による地方創生推進事業 (COC+)」
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/coc/ (アクセス日 2019.10.21)
- 2) 総務省 「地域力の創造・地方の再生」
http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/index.html (アクセス日 2019.10.21)
- 3) 総務省 (2013) 「地域実践活動に関する大学教員ネットワーク」
http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/kyoin_network/index.html (アクセス日 2019.10.21)
- 4) 文部科学省 (2008) 中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/siryu/attach/1247211.htm (アクセス日 2019.10.21)
- 5) 文部科学省 (2014) 中央教育審議会「新しい時代

にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について（答申）

6) JKS 日本コダゲーイ協会

<http://kodaly.jp/concept/silent/>（アクセス日 2019.11.9）

〔参考文献〕

- 1) 深沼 光 (2010) 「大学と地域の連携—継続の効果と課題—」『日本政策金融公庫論集』7, 21-47
- 2) 中塚雅也 小田切徳美 (2016) 「大学地域連携の実態と課題」『農村計画学会誌』35, (1), 6-11